研究論文

関西大学本『伊勢物語知顕集』について

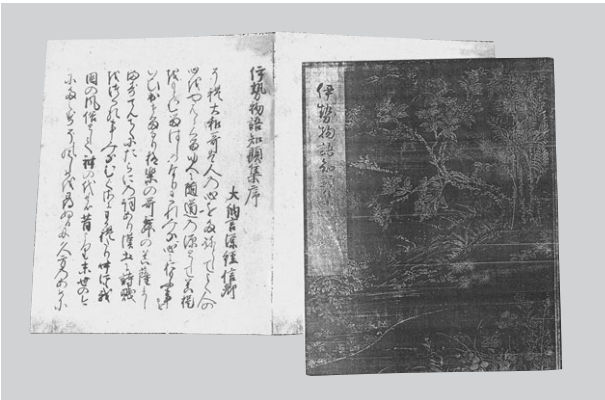
片　桐　洋　一

一、第１帖＜序・総論＞の形態と内容

関西大学図書館に新しく収蔵された『伊勢物語知顕集』（913,32　１～５）は、従来まったく知られていなかった内容を持っていて注目される。

該本は列帖装の５帖。一条兼良の書写と伝えるが、兼良の真跡からは遠い。しかし、室町時代後期の書写と見て間違いはない。

第１帖は縦27.5センチ、横20.4センチ。その第１括は５枚を折って、その第１丁を表紙に収め、次丁を前遊紙とする。第２括は６枚を、第３括は５枚を折り、最終の第４括は５枚を折って最終の１枚を後表紙に収めている。表紙は紺色鳥の子紙に金泥で川辺の木草花を描く。左上方に白紙の題簽を貼り「伊勢物語知顕集」と外題。後表紙見返しに「四拾壱枚[内白紙壱枚]」と書いた紙を貼っている。料紙は厚手の楮斐混漉き紙。１面11行、時には12行に書写している。



第１丁は、

伊勢物語知顕集序

大納言源經信卿

それ大和哥は人の心をたねとしてよく人の心をやはらぐるゆへに随(隠)遁の源として菩提をもとむるはじめなり……

という序言から始まり、墨付６丁ウラの６行目、

されば しれる人は道を

をもくしてしらずといひ、しらざる人は家をあざけりてよくしれりといふ。その道にのぞまずその心にたえざるゆへなり。

と和歌の本義と功徳を説く。

続けて、６丁ウラ（以下「ウ」と略記）の９行目

されば、いにしへより、

つたはり来ぬる歌に伊勢物語といふ物ぞゆゝしう心ふかきふぜいをまかしてかきためる、たやすくしれる人は千万が中にひとりもありがたし。かるがゆへに近曾住吉にまうでゝあやしき古人にあひてきゝあつめたりし歌物語の奥義を、あさきをもすてず、ふかきをももらさずして、さながらかきあつめて、この道をもとめながら世にまよはむ人の心のうちをてらさんとてかきあつめたるなり。たゞし聞しこと葉をのこさゞれば、和歌の知顕集と名づく。もしふかくもとめ、とをくもとむるものあらば、三きりやうをまぼりて三人まではゆるすべし。

と続き、さらに７丁ウの11行目には、

抑近曾住吉にまふでゝ、おもはざるほかに風のふきつたへたりしこと葉を、もらさずかきあつめたる物を和歌知顕集と名付けけるを、若伝見伝聞の人あらば……

というように、この「和歌知顕集」が住吉明神の言葉を伝える秘伝であることを再び述べるのだが、８丁ウの２行目からは、「去九月十三日に心ざす宿願ありて住吉にまうで侍りしほどに」社の「すのこのきはに、あやしきおきなひとりゐたり」。「あゆみよりてみれば」「とし、いまはもゝとせの坂も越え」たかと思われる翁と『伊勢物語』の奥義について問答することになる。その経過を、このように大幅に省略しつつ掲げても、繰り返しが見られる書き方で述べてゆくのであるが、要するに源經信が住吉に詣で、明神の化身とも業平の再来とも思われる百歳を越えたような翁から「としごろいぶかしかりつる伊勢物語の事、そのおこりより」（11丁オモテ〈以下「オ」と略記〉）語ってくれたと言うのである。

続いては、唐突にも翁との問答に入る。問を

「鳥」で表し、答を「風」で表す、いわゆる鳥風問答論である。

鳥、抑此物語は、いかなる人の何事をかいふとてかきたる物にや。

風、あまりにことあたらしくとひ給ふ物かな。

これは在五中将ときこえし人の、おのれがふるまひきたりし事をかきあつめたるものなり。

というように続くのである。

『和歌知顕集』とも呼ばれる『伊勢物語知顕集』の現存伝本は、宮内庁書陵部所蔵の伝為氏筆本の系統と島原松平文庫所蔵本の系統に分かれるが（両本とも拙著『伊勢物語の研究〔資料篇〕』に紹介翻刻)、この「鳥」「風」の問答体をとるのは宮内庁書陵部本の系統だけであり、島原松平文庫所蔵本の系統は「とふ」「こたふ」という語を用いている。しかし、既に部分的に引用して来た箇所だけを見ても、該本は島原松平文庫所蔵本に近く、宮内庁書陵部本の系統からは遠い。該本は島原松平文庫本が、まだ「鳥」「風」の形をとっていた段階の本を材料にして編纂されたのではないかと思わせる。事実、以下の叙述の展開や、語彙は必ずしも一致しないが、業平が書き残した『伊勢物語』を、古今集時代の女流歌人の伊勢が増補したという見解を始め、その叙述内容はおおむね一致している。

ただし、該本第17ウの「風、されば業平のゐんゑんふるまひをも知給はぬや……」から、業平は「極楽世界の歌舞の菩薩、馬頭観音なり」と言って、男女の道を仏教的付会の中で説く部分は書陵部本にはあるが、島原松平文庫本にはない、前に述べたように、該本は書陵部本系統と島原松平文庫本系統が分かれる前に派生した本であると見るか、該本編者が既に存在していていた両系統の本を適宜採り用いて編纂したと見るかの、いずれかであろうが、後述する諸点から見れば、後の見解によるべきことははっきりしている。

この仏教的付会は23ウの１行目で終わり、続いては業平が関係した女は3733人だと言い、その中でも特に問題になるのは12人だと説き、その中の一人である伊勢が業平没後に加筆したから『伊勢物語』というのだと説く。

続いては業平勅勘の真意と東下りの真偽について秘説を述べた後、第37ウの５行目からの「これも相伝の義にはあらず。翁がわたくしのこゝろ得なり。およそ伊勢物語めぐらしたる大事はこれなり」で終わり、８行目から、

次に哥の作者どもを、それぞれ申べし。

と書いて、「作者次第」に入り、

春（古恋一(ママ)） 野（業平） 若紫（古恋四）　みちのくのしのぶ（河原大臣）　おきもせずねも（古恋三）（業平）

から始めて、

ついに行（古哀傷）（業平）

という終焉の段の歌の出典と作者を書いて「作者次第」を閉じて、第１帖は終わる。

以上が、序と総論を含んだ第１帖の大体である。

二、第２帖～第５帖の形態と内容

続く第２帖は、縦25.4センチ、横20.3センチ。全４括、いずれも５枚を折った列帖装で、第１括は第１丁を表紙に収め、第２丁を遊紙にしている。また第４括は最終の１丁を後表紙に収めている。表紙は紺紙金泥で前栽の木草を描く。左上方に白紙の題簽を貼って「伊勢物語知顕集」と外題するのは第１帖と同じ。

墨付きの１オは、「伊勢物語知顕集」ではなく、「伊勢物語疏注第一」と内題を記しているのが注目される。続いて、

昔おとこうゐかぶりして奈良の

京かすがのさとにしるよししてかり

にゐにけり。…

と初段の本文を掲げ、途中の「かすがのゝわかむらさきのすり衣…」という歌で一旦切って注釈を記す。続いて再び初段本文の後半を掲げ、今度は注釈なしに終わるという、やや気まぐれな注釈態度であるが、最も注意すべきは第１帖の総論の部に見られた「鳥」「風」形式の問答体が用いられなくなり、物語本文を掲出した後、その語句を引きながら一方的に講釈するという形を採っていることである。これは書陵部本系が各章段についても、「鳥、～」「風、～」という問答形式を持し、島原松平文庫本系が「とふ、～」「こたふ、～」という形式を続けているのとは大きく異なっている。この形式の異なりは、第５帖は「伊勢物語知顕集」という内題を持つが、第２帖と第４帖が「伊勢物語疏注」と内題を記し、第３帖が「伊勢物語知顕集第二」と内題しながら、その左下に「疏注」と付記していることと関係があろう。「伊勢物語知顕集」の秘説を伝授するのが該本の目的であったが、「知顕集」は前述した２系統ともに注釈が伝存しない章段もあるので、『冷泉家流伊勢物語抄』などの他の古注をも利用したために、「伊勢物語知顕集」と名のらずに「伊勢物語疏注」

という内題を付したのであろうが、後述するように該本の書写者がすなわち編纂者であったために、「伊勢物語知顕集」という親本の内題をそのまま残してしまったのであろう。なお、粗末な素紙の題簽に書かれた各帖の外題は、「伊勢物語知顕集」の権威を尊ぶ後人が第１帖に従って、書いたものであろう。

さて、第２帖は、第28段の

むかし、色このみなる女いでゝいにければ、いふかひなくて、

などてかくあふごかたみになりにけん
水もらさじとむすびしものを

という本文で終わって注釈を記さぬままに終わる。注釈しなくても、物語本文は一応読んでおくという態度である。

またその最終丁の裏に貼り紙して「三拾八枚内白紙一枚」と記している。

第３帖以下もほぼ同じ体裁であるので記述を省略するが、この帖の端作りは、前述したように、「伊勢物語知顕集第二」という内題を記し、その左下に「疏注」と記す。内容は第29段から第63段までの注釈である。

続く第４帖の内題は「伊勢物語疏注第三」とあり、第64段の本文から第91段の注までであるが、注目すべきは最終丁の裏に上下逆の形で「伊勢物語知顕集第三」と内題を記していることである。その次の丁が他帖と違って遊紙になっており、また他帖と違って冒頭に遊紙がないことを思うと、本来はこの丁を冒頭に据えて、ここから書こうと思って「伊勢物語疏注第三」と内題を書こうとしたのだが、誤って「伊勢物語知顕集第三」と書いてしまったために、帖の上下を逆にして末尾部分を冒頭にして書き直したのであろう。

このように考えると、該本が既に存在していた親本の写本ではなく、まさしく編纂しながら書写してゆくという、「編者自筆本」であったことがわかるのである。

なお、遊紙にあたる次丁には、他帖のように貼紙ではなく、「墨付卅六枚　白紙二枚　×四十六枚」と後筆にて書き直しているが、数字が実状に合わない。

最終の第５帖は、縦25.8センチ、横20.1センチ。他帖と違って３括で終わる。いずれも５枚を折った列帖装で、第１括は第１丁を表紙に収め、遊紙はない。最終の第３括は最終の１丁を後表紙に収めていて、ここも遊紙はない。表紙も他と同じ。左上方に白紙の題簽を貼って「伊勢物語知顕集」と外題するのも他と同じである。

墨付きの第１丁は、「伊勢物語知顕集第四」と内題を記した後、第92段の本文から始まり、第26ウに終焉の段の注釈を記した後、

伊勢物語終第四
　此伊勢物語京極黄門一流本也。
　可為未来証明者歟。

という識語を記し、その裏には、

系図
阿保親王平城第三皇子
　仲平母名虎　　棟梁　　元方
　行平母同　　滋春相伝仁　　元清此子弘長アリ
　兼平母同　　師尚　　時春物語ハ伯父ヨリ相伝
　慶行僧都　　師尚母斎宮女御
　　子一ヨリ丑三ノ時ノ事カ　可尋之
　業平
　初草女母伊豆内親王　桓武第八寵娘
　守平

という在原氏の系図を記すが、架空の人物もいて、この注釈の特徴を物語っている。

次の27オは藤原氏の系図である。

閑院左大臣冬嗣
　長良一男　　良房二男忠仁公　　良相（アフ）三男　　良門
　国経　　基経照宣公　　常行貴子共　　有常女
　遠経　　染殿后清和后　　多賀幾子貴子共　　昌近
　二条后清和女御　陽成母　　染殿内侍
　高経

というように、人々の関係を示す線も引かないで列記している。裏は空白、またその次の丁は遊紙で、遊紙の裏の左下には、「廿八枚内白紙壱枚」と書いた小片を貼っている。

三、物語注釈の方法と系統

既に引用して来た部分からも察知されるように、この『伊勢物語知顕集』も、他系統のそれと同じく、平安時代後期の歌匠源經信に仮託して『伊勢物語』の背景に隠された世界を密かに伝えるという姿勢でまとめられている。またそれにふさわしく、物語の叙述の一つ一つに登場人物の実名や事件の年月日を明らかにするという、現在では考えられないような荒唐無稽ともいうべき注釈態度を示している点、いわゆる古注と呼ばれる鎌倉時代の注釈書特有の性格を備えているのであるが、今、該本の所説を他の古

注と比較しながら検討することによって、その性格を明らかにしてゆこうと思う。

『伊勢物語』には、在原業平没後によまれた歌によっている章段があることから、現在の『伊勢物語』は業平没後に増補された章段を含んでいるとする考えは早くから見られ、中でも、『古今集』時代の閨秀歌人伊勢がその増補に参画して16章段を加えたという説は有力で、第１章で述べたように、宮内庁書陵部所蔵伝為氏筆『和歌知顕集』や島原市公民館松平文庫本『知顕集』（いずれも片桐洋一編『伊勢物語の研究〔資料篇〕』所収）や『伊勢物語次第条々』（金任淑翻刻、片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション　第一巻』所収）など『知顕集』系の注釈書に共通するものであったが、この関大本『知顕集』においても、たとえば、108段に、

> この歌は紀貫之、長谷雄の卿の女に通ける時、つれなかりければ、よみてやりけるを、伊勢が十六段の筆にて詞をつくりてかき入たる也。

と記されていたり、115段の「をきのゐてみをやくよりもかなしきはみやこしまべのわかれなりけり」について、

> 伊勢が十六段の筆にこと葉つくり入たるなり。

と書かれているように、まさしく『知顕集』系のみに見られる特徴を備えているのである。

しかし、該本の場合、問題はそれほど単純ではない。たとえば、該本は、63段の「子三人」を、長男は右大将源顕景朝臣、二男は大納言源関路朝臣、三男は惟喬親王と記しているが、これは『知顕集』系の諸本とは異なる。『知顕集』系とはある意味では対立していた中世の有力注釈書「冷泉家流伊勢物語抄」の系統にのみ見られるものなのである。

今、「冷泉家流伊勢物語抄」の系統で最も礎形を伝えていると思われる河野美術館本『伊勢物語註冷泉流』（佐藤裕子翻刻、片桐洋一編『王朝文学の本質と変容　散文編』所収）の本文を掲げると、

> 此三人の子と云ハ、一ハ右大将源顕景、二ハ大納言関路也。是ハ父源大納言有国也。三ハ惟喬親王也。父ハ文徳天皇なり。有国にはなれて後、文徳天皇に思はれたる也。

とある。

それでは、この段の注釈はすべて「冷泉家流伊勢物語抄」の流れかというと、必ずしもそうではない。続く「ももとせにひととせたらぬつくもがみ……」の歌についての注では、

> 女の年は六十九歳なり。業平は五十三歳なり。九十九にはならねども、おほくつもりたる事をいわんとて、「百とせに一とせたらぬ」といへり。つくもがみとは、あぶらもなく、しろき髪をいへり。つく藻とてすげのやうなる草あり。この草はたちながら、雪のふりたるやうにかれて、しるもなき草なり。これにたとへて、つくも髪といへり。又、一せつにこの夢がたりの女は小野の小町なり。かの小町四十八にしてなごりなくすいへいして、をにのごとくになりて、きやうらんしければ、都の人きたなみおそれて近付ず。嵯峨野のほとりに人の草ひき結びとらせければ、野のわらびくろきくわゐなどをとりて、世をわたり、里に出てこつじきをして、命をたすくるほどに、時しも北山のれうしにてたけきものあり。身はいやしながら、心たけく才きゝたるものにて、人にしられつゝ丹治の成里と云人あり。年ごろのつまにをくれてなげきつゝおりおりみわざをいとなむ。成里仏事ををこなゐければ、そこばくのこつじきどもあつまりきたりける中に、いとあやしくことやうなるものあり。成里あやしみおもひて、人にとひければ、しりたるものゝいわく、「これこそ世にきこえし小野小町といふ色このみよ。いかばかりの罪のむくひにか、いきながら、かゝるかたちになんまかりなりぬる、年もまだきはならねど、あのやうにみゆるぞ」といひければ、成里あはれがりて、物くはせ、さけのませなんどして、「けふはこれにとゞまれ。とふべき事なんあり」といひければ、小町とゞまりてけり。わざはてゝ、みな人帰りて後、成里まへによびよせて、さてもかくなりし事をとふ。又、「今は昔の心はなしや。おとこなどの事おもはずや」ととふ。ありのまゝにかたりていわく、「いかでか男の事もわすれぬべき。されど、この身になりぬれば、誰か情をもかくべきなれば、たゞおもはぬやうにてこそ」といふなり。さて、成里心のたけきのみにもあらず、ゆゝしう情あるものなり。あはれがりて、ぼんなうをやすめんがために、その夜はふたりねて、夜とともにかたるに、かたちこそかくなりたれども、心はさらぬならひなりければ、たゞ心ある今のわかき人のごとし。成里あはれみて、かたはらに庵むすびてとらせ、やしなひけり。折々よりあひけるほどに、月日へてければ、五十二さいにして成里が子をうむなり。さて、成里が子二人、さ

きの妻のはらにあり。小町が子は三郎にぞあたりける。かくしつゝあかしくらすほどに、この子七歳の時、成里わづらひて身まかりにけり。その時、子二人をよびよせていふやう、「我すでにをはりぬべし。我なからん時、この女にをろかにあたるな。我やしなふごとくやしなふべし。又をさなきものゝ行すゑはぐくみたてよ」といひをきたりければ、この二人の子、おやのいひしごとくいとあはれがりてはぐくみけり。この子、人だちにければ、子のかみとりたてゝ、十三歳のとし、元服せさせて、丹治の三郎成重といひけり。

かくしつゝ、小町はや男の事は思ひ絶てありけるが、又昔に立かへりて、いかにして情あらん男にあはましと、真実にたへかねて、子三人をよび出して、夢がたりをしけり。子二人は、まことの子ならねば、いとにげなふおもひて、情なくいらへけり。三郎なる子はまことの子なりければ、我母のわかくて時めきし事をもつたへ聞ば、あはれ、さこそおもふらめとかなしくて、誰やらん、この人にあはせんとおもへども、誰かはかゝる人には情をもかくべきと思に、まこと在五中将は心におもはしからぬ人をも、人のおもふなるにはあはれむなれとおもひて、さがのにてかりしありきけるに、いきあひて、「かく思ふ」といひければ、あはれみて、やがてあひけり。

ずいぶん長い引用になってしまったが、この関大本『伊勢物語知顕集』の特徴を顕著に物語る説話的部分であるのであえて引用した。

ところで、この部分は、拙著『伊勢物語の研究〔資料篇〕』に翻刻した島原市松平文庫本『知顕集』（264～266ページ）とほぼ一致していて（宮内庁書陵部本系にはない）、前述したように、該本が島原市松平文庫本系『知顕集』の本文と深くかかわっていることが確認されるのであるが、この関大本では、その後に続けて、

「さ筵」の歌は、女なげきてよめり。「家に来たりてふす」といふは、我家に后のいらせ給ふをいふなり。惟高の家も母の家も一所に作つゞくる也。三条の大宮なり、業平しのびてまいりて見るに、后ふし給とて、「さ筵」の歌を詠じ給ふ也。後撰集八巻の歌なり。

と記す。これは、前ページにも一部を引用したように、母を小野小町ではなく、惟喬親王の母である文徳天皇の更衣三条の町とし、三男を丹治成重ではなく惟喬親王とする『冷泉家流伊勢物語抄』（『伊勢物語の研究〔資料篇〕』357～358ページ）とかかわる叙述である。つまり、関大本『伊勢物語知顕集』は、島原松平文庫本『伊勢物語知顕集』系とは、まったく異なった、というよりも対立する注釈書である『冷泉家流伊勢物語抄』の説を加えた総合的な古注であることが知られるのである。

四、資料となったその他の伝承

関大本『伊勢物語知顕集』は、今まで知られていた『知顕集』とは異なって、当時『知顕集』と並立する有力な古注であった『冷泉家流伊勢物語抄』をも取り込んだ中世の『伊勢物語』享受の集大成ともいうべきものであることを明らかにして来たのであるが、『知顕集』や『冷泉家流抄』に見られない伝承も存在していることが注目される。

たとえば、14段の「中々に恋にしなずは桑子にぞなるべかりける玉のをばかり」の歌に関連して、

染殿の后は業平にこの歌のごとくつるみじにゝしなばやとおぼしめして、この歌をつねに詠じ給へり。又柿本貴僧正は一生不犯なりしが、此染殿の后のごしん加持にめされて、玉のすだれのひまより見そめつゝむなしき我宿に帰て、祈法をうち捨て、ねがはくは、日来の利徳には、いきながら、かの后にあはんと、天にあをぎ、地にふしてをめきさけぶ間、諸天のあはれみにや、鬼になりて、不断染殿の后に打そひてありけれども、人不知かゝる思の契をばいとふべきにもあらず。宿因なれば力なし。業平のしのびて参けるには、をそれてかたさり給へり。僧正は鬼になりて、金音鬼といへり。染殿后は、ひいるといふむしにねがひのごとくになりたまへりといひけり。

と記している。

この段の注は島原松平文庫本『知顕集』になく、宮内庁書陵部本『和歌知顕集』だけにあるが、そこでは、「これは、さらに男も女もぬしなし」と人物を特定していない。それに対し、『冷泉家流伊勢物語抄』は女を二条の后にしている。しかし、この関大本は、染殿の后のこととし、柿本貴僧正（「紀僧正」の誤り）との関係を述べているのである。

この染殿の后と柿本紀僧正の話は、小異はあるが、『拾遺往生伝』に見え、関大本の創作でないことが

わかるのであるが、同様に他の注釈書には見られない話を掲げている場合を、もう一つだけ紹介しておこう。

60段である。

昔、おとこありけり。みやづかへいそがしく、心もまめならずありけるに、家とうじ、まめにおもはむといふ人につきて、人の国へいにけり。このおとこ、宇佐のつかひにていきけるに、あるくにのしぞうの官人のめにてなんあるときゝて、「女あるじにかわらけとらせよ。さらずはのまじ」といひければ、かはらけとりていだしけるに、さかなゝりけるたち花をとりて、

さ月まつ花たちばなの香をかげば
むかしの人の袖のかぞする

といひけるに、おもひいでゝ、あまになりて、山にいりてありける。

と、まず『伊勢物語』の本文を掲げた後、

宮づかへいそがしく心もまめならずとは、中将、文徳天王に宮づかへしけれども、すべて外心のみありて、朝夕ながめくらしあかすをいへり。このおとこ宇佐のつかひにいきけりとは、文徳天王の御時、天安元年五月一日、京をいでて、鎮西へおもむくなり。「ある国」とは、筑前の国なり。しぞの官人とは、東宮のがくしなり。是は宇佐のまつりの使をきらめく職をうけ給ふあひだ、しぞの官人といへり。業平、宇佐の使にくだる、かの官人もてなすさかもりのなかばすぎて、はじめて盃をいだす。盃の中に花橘をいれていだしけり。業平是を見て、小町は跡なくうせぬ、つくしへとこそ聞きしが、ゆかしゝと思て、「女あるじをいだし給へ。さけはのまん」とせめけれども、いださず。

とある。

この叙述は『知顕集』の諸本にはなく、『冷泉家流伊勢物語抄』の「貞観十二年」（書陵部本は「十三年」）とは異なっているが、「天安元年五月一日」というような架空の日付を入れて述べる古注の方法を示していて、該本が『冷泉家流伊勢物語抄』の現存伝本とは異なるが、同趣の古注の影響を受けていることを確認し得るのである。

しかし、問題はその後である。引用を続けると、

この歌の心は、昔、大唐に、玄宗皇帝とて御門ましましき。楊貴妃とてやさしき后いまそかりけり。逢は別のはじめなれば、かぎりありて別き。是をかなしみて、いのちたえんとす。かのところに、はうしといへるめでたき仙人あり。かれをたのみて、地獄極楽をくらからず尋き、蓬莱へいきけり。かの蓬莱にだいしん院とかくうつ所あり。是へ行て尋けり。ことゆへなくあへり。玄宗のおもひのさまをかたりて、すでにかへりけるが、「形見しうこにはなにをか御門にかたらん」と云。楊貴妃の給はく「天宝十七年秋、七月七日の夜、さゝめごとにいひをきし事を、御門と我より外はしれる人なし。かれをかたり給はゞ、もちい給はん」といへり。仙人、猶「いな」といへりければ、花橘を三とりいでゝ、「かれを御門にたてまつれ。我あり香は、この橘にたがはず」とてあたへければ、もて帰、御門にたてまつる。御門かれをとりて、むねにあてゝさけぶ。あり香もすこし后にたがはねば、后にむかふがごとし。かれをりてあそび給ふに、すでにしゆくに及て、うせなんとす。かなしみて前栽に実をうへけり。実生て花さき、実なる。かのあり香、后のにほひにすこしもたがはず。その時、御門の御心いよいよおぼしめしわすれがたくや。

と述べ、さらに、

この歌ゆへ、女家ぬしをいだしけり。業平も心得けり。小町あまになりて山へ入といふ事、秘事なり。

と述べて、この段の注釈を終えるのである。

『伊勢物語』の本文では、男が宇佐の使に行った時に、「その国の祗承の官人（勅使の接待役）の妻になっている旧妻に接待させよ。そうしなければ飲まない…」と強く言って、旧妻に酌をさせて、「五月待つ花橘の香をかげば……」という歌をよんだところ、女は恥じて尼になって山に入ったという話になっている。それに対して、この関大本『知顕集』では、この話が「天安元年五月一日」に実際にあったことであると言い切るとともに、その旧妻は小町のことであるとして、物語では語られていないことまで説明しているのである。しかし、いずれにせよ、「昔の人の袖の香」を橘の花の香によって表現する先例として楊貴妃の話を持ち出して語っているのが大きな特徴になっているのである。

この楊貴妃の話の基本は、白楽天の『長恨歌』に依拠したものであるが、蓬莱の島に遣わされた方士が橘の実を楊貴妃の形見として持ち帰ったというような話は知られていない。今は確認できないが、当時、文献か口誦によって伝えられていた「楊貴妃物

語」の一つをここに付加したのであろう。

関大本『伊勢物語知顕集』は、本来の『知顕集』に『冷泉家流伊勢物語抄』の類や、伝承されていた未紹介の資料をも駆使して講釈する、まさしく中世後期の総合的な『伊勢物語』講釈であったということなのである。

五、依拠する『伊勢物語』本文

前述したように、関大本『伊勢物語知顕集』は、序や総論の部分では、他の『知顕集』諸本と同じく、たとえば、

> 鳥、さても一切の物語は名目より事おこるものなり。此物語を伊勢物語と名付る事は、いかなる事ぞ。
> 風、此名目につきておほくの義あり。その中に正義は一にしてあるべけれども、今さかしき人の一義をいだしていふには、げにもとおぼゆる方もあり。とりどりの義なれども、かたりてきかせてたてまつるべし。（後略）

というように、鳥（問）風（答）という形の問答体になっているが、第１段から第125段までの注釈についてはこのような問答体ではない。まず物語の本文を掲げ、その本文について解説する形になっているのである。

今、その本文を見ると、たとえば、第49段は、

> 昔、おとこ、いもうと（めいとも）のいとをかしげなる、琴をしらぶとて見をりて、
> 　うらわかみねよげにみゆるわか草を
> 　人のむすばん事をしぞおもふ
> ときこえ（ママ）りけり。かへし、
> 　はつ草のなどめづらしきことの葉ぞ
> 　うらなくものをおもひけるかな

となっている。

まず、「いもうとのいとをかしげなる、琴をしらぶとて見をりて」の部分、通行の『伊勢物語』諸本では「いもうとのいとおかしげなりけるを見をりて」（天福二年定家本）というような本文になっていて、傍線を付した部分はない。しかし、通行本と異なって、該本に近い伝本もないわけではない。すなわち、

＊いもうとのいとをかしげなるきむをしらぶとてみをりて、　（時頼本・伝後醍醐天皇筆本）
＊いもうとのいとをかしききんをしらべけるをみて、　（最福寺本）
＊いもをとのをかしげなるきむをしらぶとて、　（伝為明筆本）

の４本がそれであるが、関大本『伊勢物語知顕集』の本文は、この内の時頼本と伝後醍醐天皇筆本と一致しているのである。

これらの４本は、いずれも古本とか別本とか呼ばれる系統に属するが、この系統の特色は形態的には定家本と一致するものの、ごくわずかながら、独自な本文を持っているという点にある。この部分についても、おそらくは『源氏物語』総角の巻の「在五が物語をかきて、いもうとに琴をしへたるところの『人のむすばむ』といひたるを見て」という本文に触発されて、「きむをしらぶとてみをりて…」「きんをしらべけるをみて」「きむをしらぶとて」という本文が出来上がったのであろう。『伊勢物語』本文の伝流史から見ると、これらの伝本は、いずれも定家本の末流と考えるほかなく、定家本に先行するとは思えないからである。

前に掲出した本文において、さらに注意すべきは、「いもうと」を擦り消して、その右に「めい（とも）」と傍記されていることである。拙著『伊勢物語の研究〔資料篇〕』所収の京都大学図書館所蔵「伊勢物語系図」（慶長十九年書写）は、この妹を「養妹」とし、業平の兄の在原仲平の娘としている。これによれば、「養妹」であって「姪」でもあるということになる。このように関大本『伊勢物語知顕集』の物語本文は、傍記を含めて、ある時期の『伊勢物語』の享受がそのままに反映していることがわかるのである。

ところで、世阿弥が関与したとされる謡曲『井筒』には、

> その頃は紀の有常が娘と契り、妹背の心浅からざりしに、また河内の国高安の里に知る人ありて、ふた道に、忍びて通ひ給ひしに、シテ風吹けば　沖つ白波立田山　夜半（よわ）には君がひとりゆくらんと　おぼつかなみの夜の道……

とあり、また続いて、

> シテ筒井筒　井筒にかけしまろがたけ　地おひにけらしな　妹見ざる間にと、よみておくりけるほどに

とあり、さらに、末尾近くにも、

> シテ筒井筒　井筒にかけしまろがたけ　地生ひにけらしな　老いにけるぞや……

とある。

問題にする部分に下線を付しておいたが、これに対応する『伊勢物語』の本文を定家の天福二年書写

本を忠実に書写した冷泉為和筆本（宮内庁書陵部所蔵）によって示すと、

①つゝゐつのゐづつにかけしまろがたけ
　すぎにけらしないもみざるまに

とあり、

②風ふけばおきつしら浪たつた山
　夜はに君がひとりこゆらむ

とある。

まず①の「つゝゐつの」を「筒井筒」とするのは、古本（別本とも言う）と言われている肖柏本・時頼本・最福寺本、真名本、広本系の阿波国文庫本・谷森本・神宮文庫本などに限られ、「すぎにけらしな」を「おひにけらしな」とするのは、以前は塗籠本と言われた本間美術館本の系統が「をひにけらしな」と表記し、別本の武者小路本が「おひにけらしな」と書いているだけであり、他は「すぎにけらしな」か「すぎにけらしも」である。

一方、②の歌の「ひとりこゆらむ」を「ひとりゆくらむ」とする本は比較的多く、いわゆる初期の定家本に属する七海本・承久本や、古本（別本）と言われている最福寺本、真名本、さらには広本系の大島氏旧蔵本・神宮文庫本・谷森本、そして①の場合に言った本間美術館本の系統というように多いが、この三つの問題本文の内、二つを満足するのは、塗籠本とも言われた本間美術館本の系統しかないということから、謡曲『井筒』が用いた『伊勢物語』は、いわゆる塗籠本ではなかったかと言う論者もある。しかし、当時の塗籠本の流布状況と、謡曲『井筒』の本説であること明らかな『冷泉家流伊勢物語抄』に「おひにけらしな」「ひとりゆくらん」という本文を持つ伝本が皆無であることを併せ考えて、謡曲『井筒』がいわゆる塗籠本系の本文によっているとする見解には私は否定的にならざるを得ないものがあった。

しかし、この新収の関大本『伊勢物語知顕集』を見ると、

つゝゐづゝ井づゝにかけしまろがたけ
すぎにけらしもいも見ざるまに

とあり、

風ふけば奥津しら波たつた山
夜半にやきみがひとり行覧

とあって、「おひにけらしも」の部分は残念ながら「すぎにけらしも」としかないが、「つゝゐづゝ」と「ひとり行覧」は一致しているのである。

関大本『伊勢物語知顕集』の物語本文は、たとえば天福本・121段の「梅壷より雨にぬれて人のまかりいづるを見て」が、「梅壷よりあめにぬれて人のまかりいづるを見て、殿上にさぶらひけるおりにて」となっているように、定家本であっても、現在通行している天福本のような本ではなく、定家の若い時に書写された、いわゆる根源奥書本や、奥書はないが、初期の定家本とすべき可能性の大きい、いわゆる古本（別本）の類ではなかったかと思われるのである。

六、まとめ

従来の、教科書的な「伊勢物語注釈史」から言えば、該本のように、物語の登場人物に実名をあて、物語中の主たる事件について、たとえば貞観×年×月×日というような日付を注するというような注釈方法は、鎌倉時代に成立し南北朝・室町時代中期まで通行していた古注の時代の産物であるとされ、室町時代後期以降の『伊勢物語』の注釈は文学鑑賞と事実確認を基本にした旧注と呼ばれる注釈に移行してゆくものと説かれて来た。

しかし、前述したように、該本が、室町時代後期に編纂者みずからが書写したものであることを思えば、この種の注釈が室町時代後期にも力を持っていたことがわかる。度々引用される言辞であるが、三条西公条の『伊勢物語抄』には、

東常縁ハ、サシタル人ニテモナキ者ニハ、以古注ヨム。ヨキ門弟ニハ本式ニヨムト云々。

とあり、後陽成院の『愚案御抄』や後水尾院の『御抄』もそれを引用しているように、室町時代後期においても、初心者には「古注」をもってまず講釈し、その後、道に執心の人には当流の説を読むというのが一般的であったことを思えば、『知顕集』に当時「古注」と言われていた『冷泉家流伊勢物語抄』の説を加えた関大本『伊勢物語知顕集』こそは、そのような初心者に対する『伊勢物語』講釈の宝典であったと見てよいのではないかと思うのである。

（元文学部教授　かたぎり　よういち　平成14年３月31日付退職）